

# 水産業への貢献

## 海と暮らしを守る

周囲を海に囲まれた日本。  
 海がもたらす恵みを誰もが享受してきました。  
 地球温暖化や海洋汚染による生態系への懸念。  
 農林中央金庫は、JFグループの一員として、  
 日本の食を守るためにも、  
 漁業者をはじめ浜のみなさまとの連携を進めています。



### 環境・生態系保全活動への支援など

農林中央金庫では、JFグループの一員として、JFグループが行う環境保全・再生活動や資源管理型漁業などへのさまざまな支援を行っています。

#### 環境保全活動

漁業者は、環境や生態系を守り育て、漁業生産を維持するために、藻場づくりや干潟の管理等に努めています。そのため、JFグループは本来業務として「資源保護や管理」「害敵生物の駆除」「種系やプレートによる藻場造成」「干潟における二枚貝や稚貝の移植・放流」「サンゴ礁域における赤土などの流入防止対策」などさまざまな環境保全・再生活動を行っています。



JFオリジナルブランド「わかしお」

さらには、JFの女性部や青壮年部を中心に、漂着したゴミ等の回収・清掃を行う「海浜清掃」や、森を守ることを通じて豊かな海づくりを目指す「植樹活動」などにも取り組んでいます。また、天然油脂を使った肌にやさしく自然環境に負荷も少ない石鹸のオリジナルブランド「わかしお」の使用運動に取り組んでいます。

#### 資源管理型漁業の推進

“獲る”から“育てて獲る”へ。JFグループにおいても、資源管理活動として、漁業者の間では、漁獲量を決める、産卵場を禁漁区にする、漁具や漁法を制限し小さい魚は獲らないなど、さまざまな取組みを行っています。また、稚魚や稚貝を育てて放流するなど、資源回復に向けた積極的な取組みとして、「資源管理型漁業」を全国各地で実践しています。



JFシェルナース※

また、JFシェルナース(貝殻魚礁)を設置して、稚魚のえさ場、隠れ場、保護育成場や産卵場などを作り、資源の回復と貝類養殖の副産物である貝殻のリサイクルに取り組んでいます。そのほか、藻場の造成・干潟の耕耘など、将来に資源を残すためのさまざまな取組みを行っています。



海浜清掃活動

当金庫は、こうしたJFグループの自主的な活動に協力するため、平成24年度は、浜の清掃作業に活用する「廃棄物処理袋」を、海浜清掃に参加した全国約300のグループ(取組人数約60,000人)に15万枚配布し、子どもたちや地域住民が海の環境保護について学ぶ糸口となるよう、「海藻おしば菜」を全国の女性部、青壮年部に18万枚配布しました。



資源管理型漁業※

また、魚食を中心とした日本型食生活の推進や食育活動に寄与するため、間伐材を使用した「エコ箸」「コースター」などを提供して喜ばれています。

※写真提供: JF全漁連



海浜清掃ゴミ袋



海藻おしば菜



エコ箸

# 水産業への貢献 現地Report

JFマリンバンクの利子助成制度を活用した組合員への金融サービスとともに、環境保全や魚食普及など“坊勢漁業協同組合”（兵庫県）の取り組みを紹介し

## はりまなだ 豊かな海を守り、播磨灘からの恵みを全国に届ける



**坊勢漁業協同組合 (JF坊勢)**  
管内は瀬戸内海の東、姫路港から約18km沖に位置する家島諸島の一つ、坊勢島。島民の約7割が漁業に従事し、所属漁船数は約930隻、兵庫県でも有数の漁獲高を誇ります。

- 坊勢漁業協同組合 (JF坊勢) の概要 (平成25年3月31日現在)**
- ▶ 組合員数 538名(含准組合員)
  - ▶ 事業の種類 販売事業・流通センター業務(冷凍販売、加工販売、水産物荷捌き保管)・購買事業・共済事業・漁獲共済事業
  - ▶ 魚種別部会 底曳網協議会(274名)、磯端漁業協議会(136名)、船曳網漁業協議会(58名)、海苔養殖協議会(31経営体)
  - ▶ 役員員数 常勤理事1名、非常勤理事11名、非常勤監事3名、職員31名
  - ▶ 管内拠点数(2) 本所・1事務所

### 若者の島離れに歯止めをかけた漁業の多角化

JF坊勢は四方を播磨灘の海に囲まれた坊勢島を拠点とし、島内にある3つの港からはシラス、丸アジ、小エビ、ズズキ、ハモなど、四季ごとに豊富な魚が出荷されます。「春はサワラやマナガツオ、夏はカニと半年間は漁獲、秋から冬の半年間は海苔養殖です」と語るのは組合員の小林悟一さん。現在でこそJF坊勢では、組合員の多くが年間で複数の魚種を取り扱っていますが、かつては違っていました。「昭和20年代は底曳網漁、昭和30年代はハマチ養殖が全盛でしたが、昭和47年に瀬戸内海を襲った赤潮被害により管内全体で13億円の被害を受けました。1年を通じて安定した漁業を営むために、海苔養殖や船曳漁など多角

化を進めたことで水揚げ量も増加し、漁業に就く島の若者も増え、昭和60年代から組合員数は500人以上を維持しています」とJF坊勢の森光則参事は話してくれました。一方、多様な魚種に取り組むため、JF坊勢の組合員の資金需要は比較的大きくなります。「漁獲と海苔養殖には異なる船が必要ですし、海苔の加工機械には1台数千万円の設備投資を行います。利子助成や共済の支援が不可欠ですね」(小林さん談)。こうしたなか、JFマリンバンクは地域の金融機関としてJF坊勢の多角化を応援してきました。



一番のこだわりは味と食の安全です。魚嫌いの子どもの多くは、よく魚を知らないだけ。本当に新鮮な魚や海苔を食べてもらえば、必ずおいしさが分かると思います。

JF坊勢組合員 小林 悟一様



小林さんが設備投資を決定した海苔の加工機械

### 島の金融機能の要として役割を果たす



JFマリンバンク兵庫 坊勢支店支店長 桂 智也様

当支店はJF坊勢の水揚げすべてに関わる決済、また新事業に際しては融資のご相談も最初に承ります。多くの方が漁業で生計を立てている坊勢島において、近代化資金など漁業独自の金融支援を行うJFマリンバンクの役割は非常に大きく、今後も全力で海の暮らしをバックアップいたします。



写真左から：JF坊勢 森光則参事、兵庫県漁協青壮年部連合会会長 大角生馬様、いかなごぎ煮、播磨灘坊勢特産味付のり

### 海で食べさせてもらっている自分たちが、海を守る

JF坊勢は環境資源保護にも積極的に取り組んでいます。「組合員数が多いということは、海に与える影響も大きい。率先して海を守らなければ—という意識があります」と森参事は言います。その一環として、廃漁網等のリサイクル、底曳きによる週休2日制の徹底や、海底ゴミの“お持ち帰り”を行うほか、保有漁船数が全国第2位と多いことから、高齢者の負担を軽減しながら環境に配慮した廃船を行うべく、廃船処理基金を設けています。

また、数年前からは他県に先駆けて海底の堆積物を攪拌する海底耕耘を開始しました。海底を掘り起こすことで、海中にリンや窒素などの栄養を取り戻す可能性があると言われており、実際に耕耘後の海ではイカナゴやシラス魚等が着実に好転しています。

### 漁業をより身近に感じ、知ってもらうために

JF坊勢の活動は、他JFとの協働を通じて広がりを見えています。JF坊勢はかねてから繁殖保護事業に力を入れており、ヒラメ、マコガレイ、アワビ、サザエなど14魚種、約128万尾を、家島諸島周辺に直接および中間育成後、放流しています。活動の根底には「みんなで豊かな播磨灘の海を育てよう」という地域漁業者に共通した想いがあります。



兵庫県認証食品に指定されたワタリガニブランド「ぼうぜがに」

「兵庫県漁協青壮年部連合会では、摂津播磨地区漁協青壮年部連合会を中心とした、抱卵ガザミ(ワタリガニ)の保護と甲幅長12cm以下の稚ガザミの再放流を展開する“ガザミふやそう会”の取り組みが27年間続いているのも、地域漁業者に共通の危機感があるからです」とJF坊勢の組合員であり、兵庫県漁協青壮年部連合会の会長も務める大角生馬さん。そして「“ガザミふやそう会”では他府県とも連携すると同時に、一般の会員も増やすなど活動の輪を広げてきました。その成果の一つとして、平成24年度には農林水産大臣賞をいただきました」と笑顔で話します。

「ガザミをきっかけとして多くの人に魚をもっと知ってほしい」と語る大角さんは、子どもたちへの魚食普及活動にも積極的に取り組んでいます。「現在、JF坊勢は地元の小学生を対象に稚魚の育成場見学会を行うほか、県の青壮年部では、姫路市内の保育園で魚の調理・試食会も開催しています。魚のブランド化は高く売ることではなく、本当に新鮮でおいしい魚を広めること。身近な存在として漁業を知ってもらえるよう活動を続けていきます」と大角さんは力強く話してくれました。

### 漁業のさらなる発展に向けて、次代につなぐ



JF坊勢 代表理事組合長 上村 広一様

組合長就任以来、常に時代の先を読んだ組合運営を心掛けてきました。漁業の多様化や共済保険の加入推進もその一環であり、近年もカキ養殖や水産加工業を通じて女性が働く場を広げるなど、将来を見据えた取り組みを続けています。次世代に引き継ぐ課題の一つが加工流通です。漁業者と消費者を仲介する商人の高齢化、量販店や居酒屋での魚の低価格化が進むなか、漁業者は一般消費者にとって身近な存在となり、“鮮度と味”を武器に勝負していかなければなりません。また多くのみなさまにも、漁業の発展が食の安全、地産地消、海資源の保護、すべてに密接に関わることをご理解いただければと思います。

※上村広一様の役職は平成25年4月現在のものです。

## 水産業への貢献 さまざまな取り組み

### 水産業振興に関する当金庫の貢献活動

#### 水産業に対する教育啓発活動

全国漁業協同組合学校(千葉県柏市)は、「協同組合精神を持った漁協職員の養成」を目的としたJFグループで唯一の教育専門機関です。昭和16年に創設されて以来、JFおよび漁村の指導者を多数養成し、送り出しています。高校や大学等を卒業しJFグループ団体への就職を目指す新卒者や、漁協・漁連等の在職者が漁業や漁協に関する理論と実務を学んでいます。

当金庫も、賛助会員として、また、一部セミナーの講義等により、将来のJFを担う若きリーダー育成に協力しています。

#### 「豊かな海づくり」運動への協力

当金庫は、昭和56年から毎年開催されている水産業最大のイベント「全国豊かな海づくり大会」に協力しています。

平成24年11月17日～18日には、第32回大会(主催:豊かな海づくり大会推進委員会、後援:農林水産省、環境省)が天皇皇后両陛下ご出席のもと沖縄県で開催され、当金庫も中央機関として協賛いたしました。

こうしたイベントを通じて、水産資源の維持培養・海の環境保全に対する意識の高揚を図り、水産業への認識を深める活動に支援を行っています。



写真提供: JF全漁連



#### 「全国海の子絵画展」への協力

当金庫は、昭和53年から毎年開催されている「全国海の子絵画展」(主催:JF全漁連、後援:文部科学省、農林水産省ほか)に協力しています。

この絵画展は、小・中学生のみなさんが絵を描くことを通して、海に対する興味、漁業に対する理解や夢を持って育っていただきたいとの願いを込めて実施されています。

#### 海の子絵画表彰者

平成24年度も「第35回全国海の子絵画展」が実施されました。全国から寄せられた約24,000点(参加約1,100校)もの応募作品のなかから、文部科学大臣奨励賞、農林水産大臣賞をはじめ水産庁長官賞、NHK会長賞、教育美術振興会理事長賞、農林中央金庫理事長賞、JF全漁連会長賞を選出、表彰されました。ここでは、農林中央金庫理事長賞を受賞された方々の作品を紹介します。

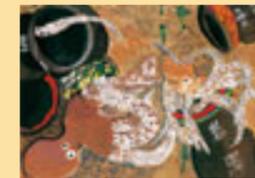
#### 小学校の部



「しらすをとりに行った船」  
三輪さん(静岡県)



「カツオ一本釣り」  
酒井さん(三重県)



「つぼからタコが出てきたぞ」  
中出さん(兵庫県)



「でかいイカ」  
川添さん(佐賀県)

#### 中学校の部



「漁船」  
中野さん(石川県)



「漁船」  
永野さん(京都府)

#### 漁船海難遺児育英資金年末募金 (水色の羽根募金)への協力

漁業は、大自然のなかでの厳しい仕事のため、安全管理に最善の努力を払っているものの、残念ながら毎年多くの尊い人命を失う事故が後を絶ちません。

漁船海難遺児育英会は、漁業従事中に起きた海難等事故の遺児に対し、就学上の援助を行っている団体です。当金庫も当育英会設立以来、育英資金の趣旨を理解し、募金に協力しています。



水色の羽根募金贈呈式

#### JFマリンバンク「海の天気予報」の放送

JFマリンバンクでは、ニッポン放送をキーステーションに全国32局を結んで、JFマリンバンク「海の天気予報」を展開しています。

#### 番組内容

- 全国の臨海地区を結んだ放送局ごとに「海の天気予報」を提供。
- 毎週月～金曜日 朝6～7時台を中心に放送。



ABCラジオでパーソナリティを務める  
慶元 まさ美さん

写真提供: JF全漁連

#### 全国青年・女性漁業者交流大会から

全国の青年・女性漁業者が日頃の研究・実践活動の成果を発表する、全国青年・女性漁業者交流大会が開催されており、当金庫も後援しています。これは、水産庁補助事業のもと、発表を通じて、広く相互の知識や研究成果を交換し深めることにより、水産業・漁村の発展・活性化のため

の技術・知識などを研鑽することを目的としているものです。平成25年3月に開催された第18回大会において農林中央金庫理事長賞を受賞した5グループのうち、地域活性化部門で受賞された「鹿児島県奄美漁業協同組合女性部」について紹介します。

#### “低利用”資源と人材を活用し、地域水産業の安定経営につなげる

##### 鹿児島県 奄美漁業協同組合女性部

長引く不況、漁獲量の減少、魚価低迷など、水産業界は非常に厳しい経営環境にあるなか、全国的に水産、加工、販売を連携融合する6次産業化に取り組む気運が高まっています。

こうしたなか、ここ奄美では、アイザメ、イソマグロ、タカセガイなど、比較的安価で低利用の水産物が数多く水揚げされていることに着目。これら低利用資源を加工し、付加価値を付けて販売できれば、漁業者や漁協などの経営改善、漁村の活性化、ひいては後継者育成につながると考え、平成18年に、奄美漁協女性部を結成。以来、幾多の試行錯誤を経て、これまでに20種類に及ぶ加工品の試作を行い、アイザメの燻製品をはじめ、タカセガイの味付け煮、カンパチの味噌漬けなどの商品開発に成功しました。

現在では、販売所でのリピーターを増やす一方で、地産地消や魚食普及という観点から、市役所、老人福祉施設、商工会、小学校などにも販路を拡大しています。これからも、独自性の強い特産品開発に力を注ぐとともに、より一層商品の魅力を高め、地域水産業の安定経営につなげていきたいと考えています。



都内での販売活動